



LGBT スタディーツアー in NY2014 報告書



主催 LGBT Youth Japan

手配実施 株式会社エイチ・アイ・エス

第1部 はじめに

1. LGBT Youth Japan について

◆沿革

LGBT Youth Japan は 2013 年 2 月に早稲田大学の学生らによって設立され、同年 8 月に国内初の NY への LGBT スタディーツアーを開催。今年も昨年に引き続き NY へ第 2 回目となるスタディーツアーを実施した。

◆理念

LGBT Youth Japan の理念は「誰もが多様性を認め合い自己肯定感をもって生きていける社会」を次世代に創り出すことである。またその理念の達成の為に、LGBT 問題に関心をもつ若者を対象に海外 LGBT 支援団体での経験や、国内外での学びと発信の機会提供を通して、新しい視点をもって日本の LGBT 問題を変える一端を担う人材を育てることを目的として活動している。

◆運営スタッフ（個人情報保護の為ここでは代表及びツアー統括の記載に留める。）

代表：川原麻亜耶

ツアー統括：小阪真紀

他 6 名のメンバー及び数名のボランティアによって運営。

◆運営スタッフの活動

①運営スタッフ顔合わせミーティング

2014 年 4 月に運営スタッフが集い都内で顔合わせミーティングを実施。その場で国内における LGBT を取り巻く諸問題について意見を出し合い、今年度のツアーの公募参加者像を議論した。

②代理店との交渉

今年度のツアーの航空券取得及び滞在先の確保について、株式会社エイチ・アイ・エス様に依頼することに決定。

③広報

広報用ポスターを作成し、Facebook 及び Twitter での告知を開始した。また朝日新聞、greenz.jp など大手メディア、ネットメディア双方で広く活動を取り上げて頂いた。

④現地訪問団体との交渉

昨年訪問した団体に加え、新規ツアーテーマに合わせて現地訪問団体を選定、訪問のアポ取りを開始した。これにより最終的に 13 の団体及び 2 企業を訪問することとなった。

⑤参加者選考

広報活動の結果、参加希望者が募集人数を上回ったため、6月中旬から下旬にかけて選考を行った。1次選考は応募用紙の審査、2次選考は面接（都合がつかない場合は Skype）形式にて行った。結果全国から計5名の参加者が決定した。

⑥選考後

参加者は7月と8月にかけてオンラインでの研修を受け、国内のLGBTをとりまく諸問題を8つのテーマに分けてそれぞれについて現状の問題を学んだ。また8月には事前合宿を実施し、3人の講師を招いて対面でディスカッションすることにより学びを深めた。

2. LGBT スタディーツアー in NY 2014 概要

①実施日時：2014年9月8日（火）～2014年9月18日（金）〈10泊12日〉

②参加人数：スタッフ5名、全国から公募の参加者5名の計10名

③渡航先：ニューヨーク

④訪問団体：現地支援団体13、企業2の計15団体を訪問

⑤ツアーテーマ

- ・教育現場でのLGBT、若者支援
- ・LGBTの老後
- ・アライとLGBTの関わり
- ・働き方を考える～企業の中のLGBT～
- ・LGBTの家族～結婚・出産・子育て～
- ・保健（HIV/AIDS）及び医療
- ・ダブルマイノリティーを考える
- ・トランスジェンダー

3. 代表及びツアー統括挨拶

LGBT Youth Japan 代表 川原麻亜耶

昨年度国内で初めて実施したLGBTスタディーツアーを今年も無事開催することが出来ました。第2回目となる今年はツアーテーマに新たにトランスジェンダーを加え、また事前研修の形式をテーマスタディ形式としたことで、セクシュアリティのみならずジェンダーの視点も取り入れた学習機会を参加者に提供することが出来ました。さらにアドバイザーとして「いのちリスペクト。ホワイトトリボン・キャンペーン」の共同代表である遠藤まめた氏を迎えてツアー中のディスカッションをより有意義なものとなるよう図ったりと、様々な新しい試みに意欲的に取り組むことが出来たと感じています。

2013年のDOMA（結婚防衛法）否決以降、各州で一気に同性婚の合法化が進むアメリカですが、その中でも最も多彩かつ先進的な活動が行われているNYを訪れることの意義は、決してLGBTを取り巻

く諸問題への取り組みを学ぶことだけに留まりません。日本から一旦離れて外の視点から視ることで、日本特有の状況に気付きを得たり、現時点では顕在化していなくとも、これから恐らく現れてくるであろう問題にふと思いついたり、日本の現在だけではなく、「これから」についても思いを馳せて考える力をつけることが出来ます。

また自分たちの力で粘り強く社会運動を推し進めてきた人々と実際に顔を見て声を交わすことで、自分たちひとりひとりこそが社会を変えるきっかけを創り出すことが出来るのだという意識を醸成し、その意識を帰国後に何らかの形で行動に変えていってほしいと切に願います。そうすることで次世代に私たちの理念である「誰もが自己肯定感をもって多様性を認め合える社会」を創り出していくことが出来ると信じています。

最後に私達のツアーに応募して志を共にしてくれた参加者各位、また私達の活動を平時より応援し支え続けて下さる関係者の皆様、お忙しい中早く事前研修への協力を引き受けて下さった講師の方々、春よりツアーを裏で支え続けて下さった株式会社エイチ・アイ・エスのご担当者様に心よりお礼の言葉と感謝の気持ちを表します。

LGBT Youth Japan ツアー統括 小阪真紀

スタディーツアー事業の目的は「LGBT 問題に関心をもつ若者をエンパワーメントする」ことです。ツアーでの経験や学びを数値化したり、貨幣価値に置き換えることはできませんが、ツアーの参加者、および NY への渡航スタッフは、何にも代え難い、現地でしか得られない経験と学びを得て帰ることができました。自分が日本でどのような活動ができるかを模索していた参加者は今後の活動のヒントを、すでに国内で活動していた参加者はより具体的な活動のヒントや新しいアイデアをしっかりと掴んできました。

ツアー前・中・後と比較すると、参加者の意識や姿勢が大きく変化していることが次第に明白になり、ツアーが彼ら参加者に与えることのできたインパクトの大きさを実感することができます。その変化の一つとして見て取ることができるのが、ツアー終了後の参加者の活動です。今年度からの新しい取り組みである「夢プロジェクト*」の一環として、帰国後にツアー参加者それぞれが、それぞれの場所で、社会に向けた働きかけを既に行っています。ある参加者は大学内でレインボーウィークを実施したり、また他の参加者は新しく LGBTA 学生サークルを立ち上げたりしています。このような、ツアー参加者が社会に対して行う働きかけこそが、私たちが目指す「誰もが自己肯定感をもって多様性を認め合える社会」の実現に不可欠であると信じ、これからも「LGBT 問題に関心をもつ若者をエンパワーメントする」活動を真摯に続けていく所存です。

*夢プロジェクト：ツアー参加者がツアー終了後から3ヶ月以内に、社会に対して何らかの行動を起こすことを LGBT Youth Japan がサポートする企画。昨年度のスタディーツアーの参加者が、今年度の参加者の夢プロジェクトのメンターとなることで、年度を超えたスタディーツアー参加者同士の繋がりを促進している。

第2部 実施報告

1. 顔合わせミーティング

7月20日午前中3時間を使って顔合わせミーティングを行った。これは、ツアー参加者同士が初めて顔を合わす機会である。参加者が関西と関東の2箇所に分かれているため、2箇所でミーティングを開催し、それをSkypeのビデオ通話で繋ぐ形式で行った。顔合わせミーティングの目的は大きく3つある。1つ目は、ツアー参加者同士で親睦を深め、仲間意識を醸成すること。2つ目は、ツアー参加者に団体理念やツアーの意義を深く理解し、理念達成に向けて主体的に動けるようになってもらうこと。3つ目は、気持ちの良いディスカッションや共同生活ができるようなグループとしての雰囲気・風土を作ることである。

<顔合わせミーティング概要>

1. 自己紹介・親睦

- ・A4の紙1枚を自由に使用して、自己紹介を1人5分で行った。
- ・全員、自己紹介の最後にLGBT関連で興味を持っている分野を発表した。

2. ツアーの意義理解

- ・ワークシートに記入する方式でワークショップを行った。団体が何を目指していて、そのためになぜスタディーツアーという手段を取っているのかを、ツアー参加者それぞれに深く考えてもらった。

3. グラウンドルール設定

- ・使用すべきでない言葉・表現を確認した。(差別用語など)
- ・ディスカッションの場、ツアーでの共同生活など状況別にグラウンドルールを全員でつくった。

2. 事前研修

スタディーツアーではLGBTを取り巻く様々な問題を8つのテーマに分けて学ぶ。しかしながらツアー参加者全員が8つの問題全てに対して十分な知識を持っている可能性は低い。また、ツアー参加者の中にはセクシュアルマイノリティ当事者も含まれている可能性も十分に考えられ、ツアー参加者同士が互いに配慮をすることも求められる。そこでまず、個々で8つの問題への知識を深める為7月と8月の2ヶ月間を通してオンラインで事前課題に取り組んでもらう。そしてこの学習とオンラインでの交流機会を通して事前研修やツアー期間中の共同生活、ニューヨークでの学びをより実りあるものにしてもらうことを目的とする。

<事前課題概要>

事前課題は前期(7月1週目~8月1週目)と後期(8月2週目~9月1週目)に分けて実施した。毎週共有された文献資料を読み、それについての考察を400字以上で提出し、それに対して事前研修担当スタッフ及びツアー参加者同士が互いにコメントをつけてフィードバックするという形式をとった。

《前期課題》

1. LGBTを考えるきっかけを生んだ学問『ジェンダー・スタディー』について
—「男」「女」「性別」って、そんなに大事な概念なの？—（7月1週目）
2. 排除と差別を考えよう
—マイノリティという概念—（7月2週目）
3. LGBTの、何を私は知っている？
—LもGもBもTも、全部勉強しよう！—（7月3週目）
4. 悩んでいるのは私たちだけではない！
—一緒に歩んでくれる「アライ」の存在—（7月4週目）
5. 愛し合うからこそ、大切なこと
—HIV・AIDSを勉強しよう—（8月1週目）

《後期課題》

6. そもそも老後には何が待ち構えているの？
—「老い」という大きな問題から見つめよう—（8月2週目）
7. 「家族」って、夢や希望なの？
—「大好き」という気持ちが、家族へ一歩—（8月3週目）
8. あなたはどうだった？
—LGBTを取り巻く学校現場—（8月4週目）
9. さあ、出発だ！！でも、その前に・・・
—「体験の言語化」これまでの経験や気持ちを言葉にしよう—（9月1週目）

3. 事前合宿

2014年8月9日（土）～8月10日（日）の丸2日間をかけて事前合宿を実施した。

合宿では8つのツアーテーマの中から3つを選び、それぞれ外部から講師をお招きして講義頂いた。ニューヨークを訪れてLGBTへの先進的な取り組みを学ぶことは、言葉にはならない驚きや感動、希望となるだろう。しかし、訪れることは「きっかけ」以上のものにはなりえない。見聞きし考え感じたことを参加者達自身が今現実として生きているそれぞれの世界で伝えて働きかけていくことが求められる。自らの考えや気持ちを形にすることは時に困難を伴うが、大小を問わず何らかの形にすることで、今度は参加者の手で誰かの背中を支える「きっかけ」となりえる。事前合宿はそのような参加者自身の手で作り出す「きっかけ」への架け橋にしたいと考えている。この考えの下、事前合宿を通じて参加者が以下の4点を達成することを目標とする。

1) 伝える力

参加者の考えや思いは、参加者の経験による言葉以上では語ることは出来ない。些細なことや個人的なことで

も、「体験を言語化」する力を身につけてもらう。また、ほんの一言が、相手を傷つけてしまう可能性に満ちていることを再確認し、より適切な伝え方を学ぶ。加えて、参加者の考えている「きっかけ」を、他者に伝える場とする。

2) 考察力

目の前にある問題の原因は本当に1つであるかを、いま一度考察する。思いがけないことが、LGBT問題をより複雑にしているのかもしれない。継続的な取り組みをしていくうえで、様々な視点を持ち、複数の要因を考察する視点を身につけてもらう。

3) ヴィジョン形成

ニューヨークへ渡航する意味を改めて考えてもらうきっかけとする。そして、何を学び、日本でどのような形につなげていきたいのかというツアー後の行動ヴィジョンを明確にする。

4) 仲間作り

異国の地での10日間は自身と向き合い、マイノリティ問題と向き合うことを意味する。その意味ではNYでの日々は時に自らの受容力を超える体験や思いが重くのしかかってくる時間となるかもしれない。しかしそのような時こそ仲間の存在がその助けとなるだろう。2日という合宿での時間は短く互いに知り合う時間は僅かであるが、旅の仲間として、またツアー後の人生における友として最高の関係を築いていけるようなきっかけづくりの場としたい。

<各テーマの研修概要>

●ダブルマイノリティー

ダブルマイノリティーのパートでは、LGBTというマイノリティはあくまでも数多あるマイノリティのひとつであるという事を踏まえた上で、個人はその時々状況に応じていつでも複数のマイノリティ性を保持し得るという事を認識し、具体的に他にはどのようなことがマイノリティと成り得るのかについてディスカッションし意見を交わした。そして複数のマイノリティを有することが社会の中での「生きづらさ」により繋がりやすくなるということ、だからこそLGBT以外のマイノリティにも配慮することが大事であるということを学んだ。

●トランスジェンダー

トランスジェンダーのパートでは、導入でホルモン治療や性別変更要件、外科的療法、カウンセリングなどの基礎知識について学んだうえで、当事者が日常生活において抱えやすい様々な事柄についてディスカッションを通して理解を深めた。

●老後

老後のパートでは「幸せな老後とは何だろう」というテーマで、あえてLGBT当事者の話題に絞らず、そもそ

もどんな老後を過ごしたいかという自分たちが老後に求める姿を描くことから始めた。そしてその「幸せな老後」に向けて何が大切なのかということ、各自が見出していく時間となった。

●働く

このパートでは LGBT 当事者がはたらく上で、障害となることを共有し、自分の生活に落とし込んで問題を認識し、また、LGBT 当事者が充実して働ける職場とはどのようなところか、そのために何が必要かについて自分なりの考えをもつことを目的とした。当日は合宿参加者でワークを行い、働きやすい職場環境についてそれぞれの意見を出し合いその可能性を探った。

●アライ

アライとは LGBT に関して正しい知識を有し、当事者を支援する存在を指す言葉である。このパートでは「社会を変える」というツアー目標を達成するために、アライが果たせる役割を皆で考える、またアライを巻き込むために自分が明日からできること・将来できることまでイメージしてもらおうということを目的とした。どうすれば良きアライとなれるのか、アライを増やすために当事者に出来る事は何か、アライが抱えやすい不安など、普段よく用いる当事者目線とはかなりことになった視点での議論となり盛り上がった。

●若者

このパートでは書籍などで報告されている青年期の問題を通じて一般的な青年期特有の問題への知識を深め、自らの青年期の体験や気持ちを可能な限り言語化することで、そのような時期を経たことで「今の自分」がいることを理解し、これから何につなげていけるか考える契機にすることを目的とした。ワークを通じて自分の青年期の体験を言葉にし、そのような経験がこれからの自分にどのような意味をもつのかについて探った。

●医療

HIV/AIDS についての基礎知識と LGBT 当事者が医療分野において直面する課題について学び、その後グループワークで事例を用いて実際に起こった問題を紹介し、それに対してどのような対応が為されるべきであったかをディスカッションした。

●家族

このパートでは「家族」という幅広いテーマのなかでも特に「親」との関係について、カミングアウトに焦点をあてて、LGBT 当事者の子供が親とどのように関係を築いていくかについて、OutProud という団体の資料を用いて、カミングアウトされた親の気持ちを辿りながら探った。

< 招聘講師 >

- ◆ 特別非営利活動法人 虹色ダイバーシティ代表 村木真紀様
- ◆ 特定非営利活動法人アサーティブジャパン認定講師 沢部ひとみ様
- ◆ 宝塚大学看護学部 教授 日高庸晴様

4. NY ツアー

ツアーは、このスタディーツアー関連事業全体の中心にあるものである。2013年度のツアーは、一般公募からのツアー参加者5名、団体スタッフ4名、そしてアドバイザー1名の合計10名でのツアーとなった。実施日時は2014年9月8日(火)～2014年9月18日(金)で、10泊12日の旅となったが、その中で移動日、休憩日を除いて、実際に団体訪問ができたのは7日間であった。現地では1日に2箇所のペースでLGBT支援NPO・企業・大学・病院を計14箇所訪問し、活動内容や団体設立の歴史などについて職員の方に詳しくヒアリングを行った。1団体につき、2～3時間ほど滞在し、通訳ボランティアの方の助けも借りながら、どの団体でも非常に細かい点に至るまで話を聞くことができた。

また、団体訪問の直後、もしくはその日中に、団体訪問で学んだことについて、ツアー参加者全員で振り返りミーティングを行った。振り返りミーティングは1団体につき1時間ほどかけて行った。ミーティングで話す内容は3点ある。1点目は、訪問団体でヒアリングしたことの確認、聞き逃したことの補填。2点目は、そこから学んだこと、印象深かったことの共有。3点目は、学んだことをどう日本で利用、活用できるか。

<各テーマごとの訪問団体概要と活動内容>

●ダブルマイノリティー

・GAPIMNY：アジア・環太平洋系のセクシュアルマイノリティー男性のエンパワーメントを目的とした団体。

1. ネットワーキング系イベント、ピアサポートの場の運営（観劇、ダンスなど）
2. チャイナタウン、コリアンタウンなどでのLGBTパレード開催
3. アジア人コミュニティにおいてLGBT理解を促進する映像作成（Asian Pride Project）
4. 国内外の人種およびセクシュアルマイノリティー差別に対するプロテスト・デモ活動

・Rainbow Heights Club：メンタルヘルスのサポートが必要なLGBT向けに、様々なピアサポート（自助）プログラムを提供している団体。

1. 依存性からのリカバリー、カラオケ、美術、セラピードッグとのふれあい、トランスジェンダー、性に関する語り場などの様々なグループ・プログラムを平日毎日開催
2. 職探し、その他の情報探しのために自由に使えるコンピュータ室設置
3. クラブのルールやプログラムについて利用者で考えるコミュニティミーティング運営

●トランスジェンダー

・TLDEF：トランスジェンダーの人の権利を守り、差別をなくすことを目指し活動する団体。

1. トランスジェンダー差別に対する訴訟の法的支援
2. 名前変更支援プロジェクト

●老後

・SAGE：LGBTと高齢者問題に対して活動している全米でも最大規模の団体。

1. デイケアセンターとして無料で毎日のプログラム（文化芸術活動やゲーム）や夕食の提供
2. パソコン教室や、職探しサポート
3. オンラインで、LGBT高齢者のためになる情報の提供

4. 介護従事者や老人ホーム職員へのトレーニングや、政策へのアドボカシー活動

●働く

・Google Gayglers : Google の LGBT 社員とアライのグループ。

1. レインボーパレードなど外部の LGBT イベントへの参加
2. ゲストスピーカーなどを招いての社内でイベントなどで、他の社員への LGBT に関する啓蒙
3. 交流会などのイベント企画

・Morgan Stanley : モルガン・スタンレーの人事部ダイバーシティ部署

LGBT 社員が非当事者社員と同じ福利厚生を受けられるように社内の制度を整える活動をしている。LGBT の大学生向けに就活セミナーを開催するなど既存の LGBT 社員だけでなく、新たに LGBT 当事者を人材として獲得する取り組みも行っている。

●アライと LGBT の関わり

・PFLAG : LGBT の家族や友人が主体となり、LGBT フレンドリーな社会の実現を目指す団体。

1. LGBT の子をもつ親を中心とした、LGBT の家族、友人のためのサポートミーティング開催
2. 学校等へ訪問して行う、教職員、保護者、学生向けの LGBT 教育
3. LGBT への差別をなくし平等な社会の実現を目指すアドボカシー活動
4. Straight For Equality というアライへのガイドラインや署名活動

●若者

・The Trevor Project : LGBTQ の若者に対する様々な自殺防止プログラムを実施している団体。

1. いじめや自殺に関する 24 時間の電話相談、毎日 6 時間のチャット相談、週 1 回の携帯メール相談の運営
2. LGBTQ の若者のための SNS サイト運営 (Facebook のように参加者が自由に交流できる。)
3. 教育施設や学校を訪問して、LGBT 授業やワークショップの開催

・New York University LGBTQ Student Center : ニューヨーク大学の LGBTQ の学生に対するサポートを行っている大学内の公的組織。

1. 大学を LGBTQ フレンドリーな環境にするための働きかけ (LGBTQ 学生用寮の設営、職員への LGBT 研修、LGBT に関するイベントの企画 (LGBT 映画鑑賞や講演会など))
2. LGBT 関連学生サークルへの資金提供、メンター的サポート
3. キャンパス内に LGBTQA の学生がいつでも集える学生ラウンジの運営

●医療

・The National LGBT Cancer Network : LGBT×がんに関連する活動をしている団体。

1. LGBT コミュニティに対して、がんの危険性や、検査の大切さについての教育活動
2. 医療従事者に対して、ケアに必要な理解力ないし適性を備えた、安全でウェルカムなケア (治療・対応) をするためのトレーニング活動

3. がん研究施設・メディア・研究機関に対して LGBT のがん患者のアドボカシー活動

・Mount Sinai Hospital : LGBT 患者フレンドリーなポリシーや施策をもつ大規模な病院。

1. グループ病院の様々な施設や部署で LGBT 患者と接するためのトレーニングの実施
2. 付属の医学部のカリキュラムに LGBT 患者への対応を組み込み、医学部生を教育
3. LGBT 患者に LGBT フレンドリーな地域のクリニックを紹介
4. SAGE (デイケアセンター) で、健康についての相談会を開催

●家族

・Gay Parent Magazine : 子育てをしている、もしくは将来子育てをしたい LGBT ファミリーのために1998年9月から刊行されている情報誌。

雑誌の内容は、LGBT 当事者で子育てをしている人へのインタビューが主な内容。その他にも、LGBT 子育てに関するその時々話題や、LGBT フレンドリーな学校の紹介。

・Marriage Equality USA : 同性婚合法化を目的として活動している団体。

1. 電話を主な手段とした市民啓発活動
2. 同性婚に賛成する国民を増やすためのキャンペーンの展開

●その他テーマ外

The Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Community Center (The Center) : NY の LGBT コミュニティに、文化活動・イベント・家族サポート・メンタルサポートなど幅広いサービスを提供している大規模な施設。

1. 個人やグループへ 15 の会議室・スペースの低価格での貸出
2. LGBT 関連書籍、書簡保存図書館の運営
3. 若者、家族、薬物・アルコール依存症、トランスジェンダーなど分野に分かれたサポートや独自のプログラムの提供

5. 報告会

帰国後の 10 月 26 日 (日) に東京報告会を約 60 人規模で開催した。報告会は春からの一連のプログラムの中で、参加者がそれぞれの原体験とそれに基づいてどのような問題意識を抱いたのか、そして NY のツアーで何を感じて何を学び、帰国後の活動にどんな風につなげていきたいかということを発表する場である。報告会の前には同一会場で LGBT 基礎講座を開催し、LGBT について学んだことの無い層に対しても知識の普及と報告会の内容へのキャッチアップに努めた。

<報告会コンテンツ>

コンテンツ
0. 来場した人からミニアンケート記入

- ① 団体紹介・代表挨拶
- ② オープニングムービー（参加者の問題意識とツアーへの参加目的）
- ③ 訪問団体紹介
- ④ NY の団体に関する質疑応答
＜休憩＞
- ⑤ ツアー参加者のトークショー
- ⑥ 夢プロ発表
- ⑦ 1 期生の活動紹介
- ⑧ クロージング

第 3 部 参加者振り返り

◆参加者 A.K（ツアーテーマ：アライについて）

1. NY で学んだこと

まず日本と違い、アライという考え方が浸透していることに驚いた。それに伴って、ダイバーシティ施策のほとんどがアライを巻き込んだものであることが印象的だった。例えば NYU の LGBTQ Centre では、サポートの対象として、LGBTQ に A を加えているほか、たくさんの人に LGBT を知ってもらおうと、セクシュアリティに関わらず参加することのできるイベントを企画している。各イベントには LGBT について楽しみながら学ぶことのできるゲームがあったり、まず楽しむということが絶対条件で、今まで LGBT に興味関心のなかった人からも興味を引くような、例えばアートとコラボしたイベントなども存在し、たくさんの人を巻き込んで、アライを“つくる”ということにフォーカスしている印象を受けた。Google では逆に、アライの積極性というのを感じた。Google は社内でダイバーシティ化が進んでいるが、それは決してルールの一人歩きではなく、ちゃんと社員にしみこんでいるということだ。例えば、プライド Month には、Gayglers に所属するアライたちが各自の PC にステッカーを貼って指示を表明したり、パレードに参加したりするというものである。やはりサポートは表明するとなお力を持つと思ったし、日本でも、アライの人が、自分もサポートしたいと思ったらそれを口に出すことができる環境を整えることが必要だと感じた。

Morgan Stanley では、社内でのアライの増加が、様々なクライアントへの対応の柔軟さに繋がり、会社のイメージアップ、利益アップにつながることも知った。日本社会でもこれから同性パートナーの同性や投資、貯蓄等が増えていけば、金融機関の窓口で働いている人の柔軟性は欠かせないものになるだろうと感じた。

ただ、課題として、アライという考え方が広まってきているとはいえ、民族や人種によってその知識に差があるということを感じた。PFLAG では、たくさん子どもからカミングアウトを受けた両親がアライになっている中で、息子からゲイであることをカミングアウトされたアジア人夫婦が息子に対する

差別に怯え、アライという人がたくさんいて今は仲間もいっぱいいるということも全然知らなかったということがあったのだ。こういった問題は、自分が知ろうとしなければ時にまったく情報として頭に入っていないことであるので、どのような情報拡散の方法を取ればいいのか、考えさせられた。また、アライの存在は本当に大切だと言いながらも、まだまだ LGBT コミュニティ内でアライの肩身は狭く、時にアライが差別を受けることがあるということも感じた。LGBT でない人から傷を受けた人からすれば、アライも恐怖の対象になり得る場合もあって、なぜストレートなのにここにいるのだと言われる場面も少なからずあるということだ。これから、アライを増やすということが日本の LGBT コミュニティや活動家の間でも新しい大きな課題となっていく中で、どのように当事者とアライを結び付け、共に活動していくかということとはとてもデリケートだからこそ、しっかり考えていかなければならないと感じた。

2. 渡航前の問題意識や疑問に関して

①【Gayglers に対して】アライ育成のための研修をしているか。もし嫌だと言われたらどうするか。社内でのフォビアにはどのように向き合うか

この質問に対し、Gayglers のメンバーは、「嫌だという人はあまりいない。しかし、受け入れることを強制することもない」と答えてくれた。他人の価値観を強制的に変えたくないという考えを日々持っている私はこの答えが本当にうれしかった。社内で否定的な態度をとることは規則上許されていないが、多様性を認めるからこそ、自らの信条や慣習に基づいて受け入れられないことがあるのは当然のことで、個人の胸の内にしまわれている間はもちろんお咎めもない。また、研修については、「多様性や個人の考え方を尊重する会社として、全体で研修会をしたり、ドラッグクイーンを招いた講演会を企画したりしている」そうだが、上記と同じ理由で、講演会への参加等も強制しないらしい。

②【NYU に対して】学内の、宗教的問題をどのように乗り越えるか？

「教会のグループに出向いて LGBT の講習をしたり、コラボしたイベントを企画したりしているが、やはりとてもデリケートで複雑な問題だ」という答えが返ってきた。そのあとに自身の実体験として、とても従順なクリスチャンとして育った彼は神との関係が自分の中で完成されていたために、自分がゲイであっても神は赦し、愛してくれると信じていることができたから自分はラッキーだったと言っていたが、このような例は珍しく、今でも悩んでいる人は多いと言っていた。

この返答を聞いて、やはりまだまだ課題は残るなあと感じた。日本はあまり宗教色は強くないが、それでもキリスト教をベースにした学校があったり、それによって神は絶対だと教えられる子どもがいる。そしてそれを一生の宗教にする人もいる。そんな中で、どのようにアプローチしていけばいいかと思っていたがその解決策というのがあまり見えなかった。

しかし、Marriage Equality の人が言っていた、「例えばキリスト教を重んじる人にとって同性愛は罪で許容することができないものであったとしても、例えばすべての人を平等に扱わねばならないという考えや、すべての人に愛を与えねばという考えについて彼らは否定することはできないから、同性愛に

賛成してもらおうというよりも、こういう人がいて、同じ権利が与えられていないのですよという風に、平等達成の面等からアプローチしていけば、賛成に至らなくとも反対派されない」ということは今のところアプローチの方法として、打開策の一つなのかなと思っている。

3. 今後「アライ」というテーマに関して日本で取り組みたい事

自分は今まで何かを発信する際、アライを増やすということを考えずに、ただ知ってほしいという思いで取り組んできた。しかし、その発信が一方通行なものにならないよう、これからはアライを増やす、そのために知ってもらう、共感してもらうということを前提に取り組んでいきたいと思う。そして、知ってもらうために、積極的に何かしらのイベントに誘ったりして、より共感を深めてもらえる機会の提供もできればなあと思っている。

とりあえず今回ゼミの後輩の前でプレゼンを行うので、アライという考え方や、関パレの宣伝等をしようと思っています。

◆参加者 A.H (ツアーテーマ「医療・保健」)

1. NYで学んだこと

渡航前自分は NY の医療は進んでいて、LGBT も安心して医療を受ける事のできる環境があると思っていた。しかし現状としては日本ととても類似していて私はとても驚いた。しかしその状況においても日本より少しずつでも前進しているのは、当事者のカミングアウトの力がとても大きいと感じた。私は渡航前、啓発活動を行い続けることにより認知度が高まり現状が改善されていくものだと信じて疑わなかった。しかしどこの訪問団体も患者のカミングアウトが大きなきっかけとなり、医療のほうが自分にコンタクトをとってきたという話をしていた。それが渡航前の考えと相反するものとなりとても興味深く感じた。カミングアウトは患者にとって二重の傷つき体験を引きおこす可能性を秘めるだけでなく、その傷つき体験から医療機関にかからなくなったりと沢山のリスクを秘めているものという、ネガティブな面でしか考えておらず、カミングアウトが医療の面での大きな力になりうるというお話は私の計画する啓発活動に新しい道を示してくれた。

また LGBT は抱える健康問題が多いという現象に対して、ストレスが多いこと、医療を重視していないので健康にも無関心であるからという二つの面でしか原因を考えていなかった。それに「何故そうなるのか」という視点が抜けていた事に一日目で訪問した National LGBT Center Network の訪問医より気づいた。健康問題の原因を行動(生活)が違うからという概念から、LG は特にバーなどに行く機会が多いため、喫煙率飲酒率が多くなるそれからストレスによりアルコール依存症になったりと健康問題が発生するメカニズムがあるといわれていたのをきいて衝撃的だった。時代、行動傾向をしっかりと把握する事で問題のメカニズムを見出す事が出来、説得力のある説明・現実的な啓発方法の形成に繋がるのだと思った。

Rainbow Height Club の訪問は個人的に一番印象的であった。正に自分が学んでいて将来目差そうとしている現場に実際に足を踏み入れ、スタッフの人だけでなく、利用者の方とも交流できた経験は私

の曇って見えなかった不安や物事を鮮明にさせてくれ、より自分の将来を現実的に見ることができた。きっと私は一生 Rainbow Height Club の事を忘れないと思う。

2. 渡航前の問題意識や疑問に関して

うれしい事に全て解決された。私が疑問に思っていたことは既に取り組んでいたり、質問をすることによって引き出した。

残念ながら第三者機関は存在しない事、アセスメント項目については現在学会で話し合われている事、専門職に対しての LGBT のトレーニングは、時間的な意味でとても困難であること（専門職は多忙であるため時間をとりにくい）こと、トレーニング方法にはオンライン・紙・直接対話の三つがあること、教育の面ではほんの少しずつではあるが医療界には保守的な人が多いので面接の際には言わないほうが良いという状況であることなどが聞けた。

3. 今後「医療・保健」というテーマに関して日本で取り組みたい事

渡航前は臨床心理に取り組む学生の中で、特に LGBT に興味がある学生、または当事者の学生があつまる場所を作りたいと考えていたが、現在は主治医をはじめとする医療関係者にカミングアウトをする当事者とカミングアウトを受ける医療関係者の両方をサポートする事をしたいと考えている。上記でも書いたように私は今回のツアーでカミングアウトの効果についてとても感銘を受けた。それからカミングアウトの可能性についてポジティブに考えてみたり、医療の面では第三者が呼びかけるよりも患者さんのほうがより動かしやすいという考えに至ったからである。

しかしカミングアウトは受け止めてもらえれば良い、というわけでもないしかとってボロクソに言われ傷つくからだめというわけではないと考える。例えば、好意的に受け止められたとしても主治医の中でさほど大きな問題（健康リスク・ストレス問題など）と捉えられなければそれがただの「付属品」のような位置づけになってしまうのではないだろうか。またカミングアウトをした自分の患者にどうしてあげればいいのか分からない、つまり当事者の抱える問題について想像がつかない為、問診・アセスメントをスムーズに行うことが困難になるなど、当事者の傷つきリスクと同時に受ける医療従事者の方のリスクも考えられる。そして医療従事者のリスクは今後の患者との関係にも少なからず影響が出てくると考えられるのはどちらか一方のサポートより双方のサポート体制が必要なのではないかと考えた。

カミングアウトを考えている当事者には、何故カミングアウトをしたのか・それについて何が困っているのか、など具体的な支援のニーズを示しカミングアウトをした理由を明らかにするなどカミングアウトをサポートする事で、「プライベートな話はやめてくれ」「趣味の話は今関係ないだろう」などと突き放されるリスクを回避できると考えられる。また患者一人にカミングアウトを背負わせる事をせず、その患者にあわせカミングアウト方法を一緒に考えたり出来るだけ個々にあわせたカミングアウト方法を考えていきたいとおもっている。

カミングアウトを受けた医療従事者に対しては、こちらの団体で作成したオンラインでのビデオでのトレーニング、ガイドラインを公開したり、場合によっては直接コンタクトをとり研修をおこなったりする事で支援方法、ニーズ、などより具体的なトレーニングにつなげられると考えている。その為には

冊子などを活用し患者にカミングアウトの際に一緒に渡してもらうことで自分の団体を知ってもらい、上記のサポートにつなげていきたいと考えている。

第4部 終わりに

1. 謝辞

2014年度 LGBT スタディーツアーは多くの方々の温かいご支援の元無事成功を収めることができました。LGBT Youth Japan の活動にご理解をして頂き、多方面からご協力して頂いた方々に心より感謝申し上げます。今後とも LGBT Youth Japan の活動を温かく見守っていただければ幸いです。

2. 御協力

◆御協力

株式会社エイチ・アイ・エス

◆寄付

Ready For?にてご支援頂いた皆様

報告会等にてご支援頂いた皆様